和書門
類
號 二〇四三六
函 五八
架 二
冊 三二

内閣文庫
和書
類
號 二〇四三六
冊 三二
函 二六三
架 一九

内閣文庫	
番號	和 20436
冊數	32 (7)
函號	263 43

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集略解

四上

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書
淺草文庫

萬葉集巻第四

相聞

難波天皇妹奉上在山跡皇兄御歌一首○崗本天皇御製一首并短歌○額田王思近江天皇作歌一首○鏡王女作歌一首○吹黄刀自歌二首（刀を力ニ誤）○田部忌寸櫟子任大宰時歌四首（大宰の下帥の字を脱せるか 本文ニ無けれハ思ひてあるこの）○柿本朝臣人麻呂歌四首○基檀越往伊勢国時留妻作歌一首（基本文ニ碁ニ作る）○柿本朝臣人麻呂歌三首○柿本朝臣人麻呂妻歌一首○阿部女郎歌二首○駿河婇女歌一首○三方沙弥歌一首○丹比真人笠麻呂下筑紫国時作歌一首并短歌○幸伊勢国時當麻麻呂大夫妻作歌一首○草嬢歌一首○志貴皇子御歌一首○阿倍女郎歌一首　中臣朝

臣東人贈阿倍女郎歌一首　報贈
と一本巻子作る○大納言兼大将軍大伴卿歌一首○石川郎女
歌一首○大伴女郎歌一首　後人追同歌一首同本文の二本和子作
○藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌一首○京
職大夫藤原麻呂大夫贈大伴郎女歌三首藤と草子伴上大と太と誤○大
伴郎女和歌四首○大伴坂上郎女歌一首大上本文又の字て○天皇賜海
上女王御歌一首　海上女王奉和歌一首○大伴宿奈
麻呂宿祢歌二首歌字と脱○安貴王戀歌一首并短歌本文王の字无○
門部王戀歌一首一本の字を挟○高田女王贈今城王歌六首○神
龜元年甲子冬十月幸紀伊国之時為贈従駕人所誂娘
子笠朝臣金村作歌一首并短歌○二年乙丑春三月幸
三香原離宮之時得娘子笠朝臣金村作歌一首并短歌

幸の字と脱○五年戊辰太宰少貳石川朝臣足人遷任餞于筑
前国蘆城驛家歌三首○大伴宿祢三依歌一首○丹生
女王贈太宰帥大伴卿歌二首○太宰帥大伴卿贈大貳
丹比縣守卿遷任民部卿歌一首一首の字と脱○賀茂女王贈大
伴宿祢三依歌一首○土師宿祢水道従筑紫上京海路
作歌二首○太宰大監大伴宿祢百代戀歌四首○大伴
坂上郎女歌二首○賀茂女王歌一首○太宰大監大伴
宿祢百代等贈驛使歌二首○太宰帥大伴卿被任大納
言臨入京之時府官人等餞卿于筑前国蘆城驛家歌四首
○太宰帥大伴卿上京之後滿誓沙弥贈卿歌二首　大
納言大伴卿和歌二首○太宰帥大伴卿上京之後筑後
守葛井大成連悲歎作歌一首○大納言大伴卿新袍贈

攝津大夫高安王歌一首○大伴宿祢三依悲別歌一首
○金明軍與大伴宿祢家持歌二首○大伴坂上家之大
孃報贈大伴宿祢家持歌四首○大伴坂上郎女歌一首
○大伴宿祢稲公贈田村大孃歌一首○笠女郎贈大伴
宿祢家持歌二十四首　大伴宿祢家持和歌二首○山
口女王贈大伴宿祢家持歌五首○大神女郎贈大伴宿
祢家持歌一首○大伴坂上郎女怨恨歌一首幷短歌○
西海道節度使判官佐伯宿祢東人妻贈夫君歌一首
佐伯宿祢東人和歌一首（一首の字を脱）○池邊王宴誦歌一首（一首）
（の字を脱）○天皇思酒人女王御製一首（本文製の下歌の字あり）○高安王裹
鮒贈娘子歌一首○八代女王獻天皇歌一首○娘子
報贈佐伯宿祢赤麻呂歌一首　佐伯宿祢赤麻呂歌一

首（本文歌字上和の字あり）○大伴四綱宴席歌一首○佐伯宿祢赤麻呂
歌一首○湯原王贈娘子歌二首　娘子報贈歌二首
湯原王亦贈歌二首　娘子復報歌一首（本文報の下贈の字あり）　湯原
王亦贈歌一首　娘子復報贈歌一首　湯原王亦贈歌
一首（亦と人ヨ誤）　娘子復報贈歌一首○湯原王歌一首○紀
女郎怨恨歌三首○大伴宿祢駿河麻呂歌一首○大伴
坂上郎女歌一首○大伴宿祢駿河麻呂歌一首○大伴
坂上郎女歌一首○大伴宿祢三依離復相歡歌一首○
大伴坂上郎女歌二首○大伴宿祢駿河麻呂歌三首○
大伴坂上郎女歌六首○市原王歌一首○安都宿祢年
之歌一首（々歌字を脱本文之を足ヨ作）○大伴宿祢像見歌一首（宿祢の字を脱）○安
倍朝臣蟲麻呂歌一首○大伴坂上郎女歌二首○厚見

王歌一首○春日王歌一首○湯原王歌一首　和歌一
首不審作者○安倍朝臣蟲麻呂歌一首○大伴坂上
郎女歌二首○中臣女郎贈大伴宿禰家持歌五首○大
伴宿祢家持與交遊別久歌三首（本久々の字无）○大伴坂上郎女
歌七首○大伴宿祢三依悲別歌一首○大伴宿祢家持
贈娘子歌二首○大伴宿祢千室歌一首　未詳○廣河
女王歌二首（王字下に二の字を入變）○石川朝臣廣成歌一首○大伴宿
祢像見歌三首○大伴宿祢家持到娘子之門作歌一首
○河内百枝娘子贈大伴宿祢家持歌二首○巫部麻蘇
娘子歌二首○大伴宿祢家持贈童女歌一首　童女和
贈大伴宿祢家持来報歌一首（本文和より持まで八字无）○粟田娘子贈
大伴宿祢家持歌二首○豊前国娘子大宅女歌一首○

安都扉娘子歌一首○丹波大女娘子歌三首○大伴宿
祢家持贈娘子歌七首○獻天皇歌一首○大伴宿祢家
持歌一首○大伴坂上郎女従跡見庄贈賜留宅女子大
嬢歌一首（并短歌）○獻天皇歌二首○大伴宿祢家持贈
坂上家大嬢歌二首　大伴坂上大嬢贈大伴宿祢家持
歌三首　又大伴宿祢家持和歌三首　同坂上大嬢贈
家持歌一首　又家持和坂上大嬢歌一首　同大嬢贈
家持歌二首　又家持和坂上大嬢歌二首　更大伴宿
祢家持贈坂上大嬢歌十五首○大伴田村家之大嬢贈
妹坂上大嬢歌四首（妹と姉と誤）○大伴坂上郎女従竹田庄贈
賜女子大嬢歌二首○紀女郎贈大伴宿祢家持歌二首
大伴宿祢家持和歌一首○在久邇京思留寧樂宅坂

上大嬢大伴宿祢家持作歌一首（宅の下舊京二字ありて、なければ係る作歌の下一首の字を脱）藤原郎女聞之即和歌一首○大伴宿祢家持更贈大嬢歌二首○大伴宿祢家持報贈紀女郎歌一首○大伴宿祢家持従久邇京贈坂上大嬢歌五首○大伴宿祢家持贈紀女郎歌一首　紀女郎報贈家持歌一首　大伴宿祢家持更贈紀女郎歌五首○紀女郎裹物贈友歌一首○大伴宿祢家持贈娘子歌三首○大伴宿祢家持報贈藤原朝臣久須麻呂歌三首（三を二ニ誤ル）　又家持贈藤原朝臣久須麻呂歌二首　藤原朝臣久須麻呂来報歌二首

相聞

難波天皇妹奉上在山跡皇兄御歌一首　妹の上に皇の字あるべし。天皇ハ仁徳天皇也。皇子十人皇女九人おはしませバ、いづれともさしあつべくもあらで、皇兄ハいづれ皇子の清中せ

一日社人母待告長氣乎如此所待者有不得勝

ひとひこそひともまちつげ、ながきけをかくまつるれバ、ありかてなくも

つげハ継ぎてなく続づくる、ながきけハ月日久しく来といふ、こそてなくも
ハ結びの語こそ聞え、宣長ハ所ハ耳の誤なり、かくのみまちてむとおもしあらんを

いつり

岳本天皇御製一首并短歌　製の下歌の字を落せり

神代從生継来者人多國爾波滿而味村乃

かみよよりあれつぎくれバ、ひとさはにくにはみちて、あぢむらの

登ハ死豆二字ノ誤カ

去来者行跡。吾戀流。君爾之不有者。晝波日乃久流留麻豆。
いざとハゆけど、わがこふるきみにしあらねバ、ひるハひのくるゝまで
夜者夜之明流寸食。念乍。寐宿難爾登阿可思通良久茂。
よるハよのあくるきはみ、おもひつゝいねがてにとあかしつらくも
長
此夜乎
なかきこのよを

あれ孫ハ生徒之、味爽の枕詞、朝の大路の人かよふるにつれて知さまた、
登ハ死豆二字の誤なるべし、又ハ管の誤にてもあるべし、さらバいねがてまつとは
訓べし、いねがてにあかしつるの事と略く例おほし、爲ハいとふれき、あかしつくらくもハ
あかしつると延言、是ハ明亀、元ハ飛鳥の天皇女をあかしめてよしとよませ
まへるなり、後岳本の御斉とせバ斉明天皇いまだ后にておはしぬ
ほどよ、斉明を宝と云なしたしよみて有へきにもあるべし、宝もいりく

呂ハ乃ノ誤

去来いざと訓て、さきこそそがよひハゆけどもよからんか、さて、いねがてに云々、登
の字の有ハ衍字なるべし、或ハ補ていねがてにして君悪登ぞなどいへり

反歌

山羽爾味村騒。去奈禮騰。吾者左夫思恵君二四不在者
やまのはにあぢむらさわぎゆくなれどわれハさぶしゑきみにしあらねバ
あぢ亀ハ多く群飛ながいつもいさ寄る鳥故、味さはふの隊ぞ表し、さて
此ハさびしよしにハ同じ、是を、人多くみちてハあれどさびしとよみたるなり
味亀を郡行人にたとへたる

淡海路乃。鳥籠之山有。不知哉川。氣乃己呂其侶波。戀乍裳
将有
あふみぢのとこのやまなるいさやがはけのこのごろハこひつゝもあらん
巻十一柏上のとこの山なるいさやがはとよめり、氣ハ大かたいへるやくなくと

いつの日にか宮ちかき君ハ乃の證とかつぐべきさくこれハいさゝかにいはむ説の
名をやがて女の情をいさゝか霧にいはふとやとなしあやしいて、其の律猶いひて
うぢちに使て みをよこしよふいへる歌之

右今案高市岳本宮後岡本宮二代二帝各有異焉。但
偁岡本天皇未審其指 ほくの書加へしく

額田王思近江天皇作歌一首 天皇ハ天智天皇也。額田王そじめ
天智天皇にめされしを、天武天皇太子の時よりおもひしまゝにし時よりも語りし
をかけたへるより後一の方のつくさへる、さもしくふもあないひて

君待登吾戀居者我屋戸之簾動之秋風吹
きみまつとわがこひをればわがやどのすだれうごかしあきのかぜふく

歌の心ハみれバ著の風のぬくくさき君の来るかともおもひよとにいひよるべし、
後ハ行にしく秋之風吹とあるによる

鏡王女作歌一首 天武紀に天皇初娶鏡王女 今本女の字脱たり。紀日本紀に女の字あるによる
額田姫王生十市皇女とあるを、ここに王女とあるハ誤り。鏡女王とあるべし、
さて鏡女王ハ則鏡王の女にて、額田女王の姉しらん。宮ちかき此の歌よりハ近
江野洲郡の鏡里に住たまひし故に鏡まとはせしならん。そ女子もさし父
のちに住たまひし故鏡王とはかくたまひ、それより父とまぎるべき事ハ女の方とハ
鏡女王といひてふさはしかるならん。次に内大臣の娉せる事あるハいまふ
天皇の御へハまハざかしけれのものつかふべきよしいひて

風乎太爾戀流波乏之風小谷将来登時待者何香将嘆
かぜをだにこふるはともしかぜをだにこむとしまたばなにかなげかむ

必まんなのと思ひて歌ハ何かハ数べき、風ぞまちあはむ時ハ乏しくて、め…も
まちたる方になげくとく宮もちさこの白の風をだにまハよるよき詞とまぎれなる
のごとく風をだにまちあらばなしとまづ二句を言ひかそゝへていへば歌ハ此の額田

女王の天皇へたてまつる歌ときこえてかくよめるとみえ侍れど左の男絹との歌と
此歌のかなふまじきハいふに及ばず哉

吹黄刀自歌二首　改む

真野之浦乃與騰乃繼橋情由毛思哉妹之伊目爾之所見
まぬのうらのよどのつぎはしこゝろゆもおもへやいものいめにしみゆる

真野ハ摂津にありてよど川の淀せる橋なるべし継橋ハ所の継目の橋
のかくハ中よりの所ありて淀せるとつぎくさして継橋といふ
をやがて継てある事をよめるなりこゝろゆもハ心よりもといふ也おもへやハ
おもへバやのよしを思ふ夜も伊目ハ夢也いめといひし也夢ハ
なればいめともいふ也と契沖ハ云へり此妹といへるハ男の歌也吹黄
刀自ハ男なるを聞しいへる證得もしが歳長く見ゆるを以て次の歌ハ
刀自が歌と見ゆれバこゝも證得也とすべし

河上乃伊都藻之花乃何時何時来益我背子時自異目八方
かはのへのいつものはなのいつもいつもきませわがせこときじけめやも
いつハ五百津にて多く生ずる藻をいふなるべしさていつもといはん序
のみ自異ハかならず時あるにもあらでいつといふこともなしといふ意やその
詞ハ反語にて時じけめや時ならずといふ也

田部忌寸櫟子任大宰時歌四首　傳しられず

衣手爾取等騰己保里哭兒爾毛益有吾乎置而如何将為
ころもでにとりとゞこほりなくこにもまされるわれをおきていかゞせん

元
舎人千年

母の衣の袖にすがりてなくこよりもまさりておもふ我をおきて行者の
なきて櫟子が任に赴く時に妻がよめると見ゆ

置而行者妹将戀可聞敷細乃黒髪布而長此夜乎

おきてゆかバいもこひんかも しきたへのくろかみしきてながきこのよをと

元 田部忌寸櫟子

元暦本みゆるに此櫟子がうたハ元の巻にハあれども、妹ハ櫟子が妻を云

ころのさしきてハ妹が髪のおのづからゆるを以

吾妹兒矣相令知人乎許曽戀之益者恨三念

わぎもこをあひしらしめしひとをこそこひのまされバうらめしみおもへ

をとめを媒せし人をいふ。ありし詞にも櫟子之

朝日影爾保敝流山爾照月乃不猒君乎山越爾置手

あさひかげにほへるやまにてるつきのあかざるきみをやまごしにおきて

去所のこしきのおもひきをいひてやうてあのぞろこいうん膚とせう

櫟子が旅立時、妻どおもひておるを地しめるか、又ハ君をいへるこのうた

右の千年ちたゝとさしていへるか

柿本朝臣人麻呂歌四首

三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨

みくまののうらのはまゆふもゝへなすこゝろハおもへどたゞにあはぬかも

熊野ハ紀伊國なり、濱ゆふハしら濱おもととりて芭蕉の皮葉をかさねて

まく七月花咲て、花の形茗荷のめぐりに綿あれバ木綿のやうなりとぞ、

ことさらよみの濱人にあたしとぞ、一重皮のかさなれることを百重にたとへたるにて

めくといふん膚に從ふも、ふでふおもへど直にあはぬといへる

古爾有兼人毛如吾歟妹爾戀乍宿不勝家牟

いにしへにありけんひともわがごとかいもにこひつゝいねがてにけむ

古のありけん人ハ我ごとく妹に恋つゝいねがてにふけん

けむと

今年之行事庭不有古人曽益而哭左倍鳴四
いまのみのゆきふハおとむていにしへのひとぞまさりてなきさへなきし
紬んくくるしき意のいにしへ人もまさりしきちとひくとりいて自らちぎてさむ之
百重二物来及毛常念鴨公之使乃雖見不飽有哉
わくへにもしきおよべもとおもへらしきみがつかひのみれどあかのざらん
及ハ千まるこをまうく使のいくたびきことよしと云ヘバも来れども使を
あくぞおもふといふ意也ハ二の句きくるより来句をまた句として二の句と共へ
もとよちんといへり哉ハ武の誤なるべし
碁檀越往伊勢国時留妻作歌一首　碁ハ氏檀越ハ名なるべし
名れど拙るうへえで碁古本及目録ニ基ニ作る
神風之伊勢乃濱荻折伏客宿也将為荒濱邊爾
かんかぜのいせのはまをぎをりふせてたびねやすらんあらきはまべに

浜荻の拾ゆ、和名抄荻和名乎木、これハ濱に生ずる荻之蘆とハ異るものなり
柿本朝臣人麻呂歌三首
未通女等之袖振山乃水垣之久時従憶寸吾者
をとめらがそでふるやまのみづがきのひさしきときゆおもひきわれハ
をとめらが袖ふる大和石上布留宮に神ふるとつひたしらあ、みづ
がきの枕詞、ふるきやしろをいへるに久しきといへるのこ、まで十一
同事を載て久しき時由とかけり
夏野去小壮鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉
なつのゆくをしかのつのゝつかのまもいもがこゝろをわすれておもへや
鹿ハ夏のはじめに角落ておひのぼるがいまだ短ければ束のあひだといへ
束とせしんハ忘れしおもひにあれんやといふ
珠衣乃狹藍左謂沉家妹爾物不語来而思金津裳

たまぎぬのさゐさゐしづみいへのいもにものいはずきてぞおもひかねつも

珠衣ハ狩衣か。考に巻十四安利伎奴乃、巻十六蟻衣之とあるによりて、珠衣をもありぎぬとよめれど、猶うたがはしき事あれバ、しばらくここにハ古訓によれり。附録にいふべし。さゐさゐハさやぎさわぐ、しづみハ沈めなり。夫の遠き旅に出立つ時、妻が歎きさわぐを、しづめんとて、そのまゝえものいはずて別れ来て、旅にて思ひ堪がたしといふなり。ここや、巻廿防人の歌のうちに、父母に物いはずきにていまぞ悔しきともよめり。此歌巻十四東歌に安利伎奴乃佐恵佐恵(サヱサヱ)之豆美(シヅミ)とありて末ハ於毛比具流之母(オモヒグルシモ)とて載たり。今同じ歌也。右の歌のたゞ人麻呂歌集中に出て記したり。此方集にハみづからのにも又他人の歌をも書けるに依て、その歌ならぬもあれバ、人麻呂の歌としも定がたく、右の集ハことに東歌の様よりも後の物と見ゆれバ、東歌を載るとなしとよむべくハ論

柿本朝臣人麻呂妻歌一首

君家爾吾住坂乃家道乎毛吾者不忘命不死者

きみがいへにわれすみさかのいへぢをもわれはわすれじいのちしなずば

神武紀菟田(ウダ)高倉山の巓にのぼりて国中をみ給ふに、墨坂に焃炭を置とあり。大和宇陀郡也。此妻ハ巻二人麻呂妻死せる時の歌に、天飛や軽のみちハ吾妹子が里にしあれバといへれバ、其妻死たるハ軽なり。墨坂ハ後にまた娶し妻の家なるべし。宮より此方君が家に吾住とハ住といふ意なれ、又ハ坂ハ借字なるか。かまくらの宇陀の墨坂とハ思へれど、彼地ハ大和の都を遠き地なれバ、京人の妻にすべき所にハあらじといへど、ただ人女の許へ通ふを住といへり。いせ物語に業平の子幸が女に住しなどの類ひ多し。此ハ女の家なれバかくいへる也。これらもいぶかし。猶考べし

安倍(アベ)女郎歌二首

目録に阿部とあり

今更何乎可将念打靡情者君爾縁爾之物乎
いまさらになにをかおもはん。うちなびきこゝろはきみによりにしものを
考に四の句の下の思字を失て何か思はんとよめり
吾背子波物莫念事之有者火爾毛水爾毛吾莫七國
わがせこはものなおもひそ。ことしあらばひにもみづにもわれなけなくに
末一云大きに誤れり。末の句のつぎてよくよめる吾莫勿久尓とあるを
誤りていへるなるべし。われはなけなくにといふこゝろにていへるにて火
に入水に入のたぐひのことあらばいとはぬといへるなり。卷九
菟原處女の墓の歌に水に入火にも入んと立むかひてゝ、垂仁天皇の皇后狭
穂姫の火に入まし日本武尊の妃橘姫の水に入しなどの古事をもおもへるなるべし
もとのまゝにきこゆ
駿河婇女歌一首
古本に采女を婇とかけり

敷細乃枕従久久流涙二曽浮宿乎思家類戀乃繁爾
しきたへのまくらゆくゝるなみだにぞうきねをしけるこひのしげきに
枕よりもくゞりくだる泪をいふ。古今集涙川枕ながるゝうきねにはとよめる
よくよみしなるべし
三方沙彌歌一首
衣手乃別今夜従妹毛吾母甚戀名相因乎奈美
ころもでのわかるゝこよひゆいももわれもいたくこひんなあふよしをなみ
常の後朝の別にはあらで、故ありて再逢がたきをなげけるなるべし
丹比真人笠麻呂下筑紫國時作歌一首并短歌　丹比ハ
紀に多治比氏あり。笠麻呂ハ傳しられず
臣女乃匣爾乗有鏡成見津乃濱邊爾狭丹頬相
たをやめのくしげにのれるかゞみなす。みつのはまべにさにづらふ

紐解不離。吾妹兒爾。戀乍居者。明晩乃。旦霧隱。
ひもときさけず。わぎもこにこひつゝをれば。あけぐれのあさぎりがくり。
鳴多頭乃。哭耳之所哭。吾戀流。千重乃一隔毋。名草漏。
なくたづの。ねのみしなかゆ。わがこふる。ちへのひとへも。なぐさもる。
情毛有哉跡。家當。 吾立見者。 青旗乃。 葛
こゝろもあれやと。いへのあたりわがたちみれば。あをはたの。かづら
木山爾。多奈引流。 白雲隱。 天佐我留。 夷乃國邊爾。
きやまに。たなびける。しらくもがくり。あまざかる。ひなのくにべに。
直向。 淡路乎過。 粟島乎。 背爾見管。 朝名寸
たゞむかふ。あはぢをすぎ。あはしまを。そがひにみつゝ。あさなぎ
二。水手之音喚。暮名寸二。 梶之聲爲乍。浪上乎。五十行
にかこのこゑよび。ゆふなぎに。かぢのとしつゝ。なみのへを。いゆき

左貝久美。磐間乎。射往廻。 稻日都麻。浦箕乎過而。
さくみ。いはのまを。いゆきもとほり。いなびつま。うらみをすぎて。
鳥自物。奥津左比去者。家乃島。荒礒之宇倍爾。 打靡。
とりじもの。なづさひゆけば。いへのしま。ありそのうへに。うちなびき。
四時二生有。莫告我。 奈騰可聞妹爾。不告来二計謀
しゞにおひたる。なのりそが。などかもいもに。のらできにけん

臣女まうしあげと訓たれど。さる詞の例なし。此二字ハ姫の字の誤れるなるべし。
やめとよまん。又臣女みやびめとも訓べし。宇ニ女ハ臣ハ妹の誤なるべし。
れといへり。隱らすハ後の如く。三津ハ難波。さふづらふハ紅らふの枕ことば
なれバ赤紐しづけたり。さて紐解ぞ枕居せるを。あけぐれハ夜の明がた
まだくらきほどをいふ。はべくれといふてまゐるを。あけぐれるをいふしなく。
なるさづハ朝のなきをやうて席を設て。おのづからなびかひたりしをいふ。

なぐさもるハ慰る也、旗ハ楊の字の誤なるべし、古本ニハあをやぎとよむべし、かづらきといふ冠らせたる詞也、天ざかる枕詞、この詞鄙言の字ニ例なし、我ハ柯の字などの誤れるにや、粟島ハ巻三武庫の浦を榜たむ云々粟島をそがひに見つゝとある所ニ同し、そがひハ背向にてうしろに見ゆる也、い行さぐゝみのいハ發語、祈年祭祝詞ニ磐根木根履佐久弥氐と云ニ同じく、踏さくみ行ての意也、稲日都麻ハ播磨印南郡ニある海中の島なるべし、巻六伊奈美都麻辛荷島とつゞけたり、浦箕ハ海べをよみといへるに同じく、浦びも又同じ、ひとみハ通へれば、うらみとよみつるを誤なるべき、宮本にハすべて浦廻とあるをうちまかせてハくはしく、然るにこゝに麻とあれバうらまとよむべし、うらもまとみと通へバうらみとよまむといへり、名所拙ハ紛るゝの誤かともいふべし、なづさひハ既にいへり、家島ハ神名帳ニ播磨揖保郡家島神社見え、後世傳舟と云といひ後あれど志ひごとく、ものりそもハ

濱藻ハ上ニ同し、允恭紀衣通姫の歌ニ海の濱藻のよる時々をといふを、天皇此歌他人にきかすなとのたまひしより時人濱藻を奈能利曽毛といへるよし見えて、さて告なそといへる料也、宮本ハ莫告の下我ハ淺の誤にて、なのりそもと訓べしといへり

反歌

白妙乃袖解更而還来武月日乎数而往而来猿尾

しろたへのそでときかへてかへりこんつきひをよみてゆきてこましを

袖ハ紐の誤なるべし、ときかへてなるべし、上二句ハ共寝しゝことを云、さて遠く帰らん月日といつごろと数へて、妹もしかよしと嘆く流るへ待て、むものと、さるてふいなびて来るを悔る意也、古本の結句ゆきてきもへんといふまてしるてより、前ハいはれき、宮本ハかのゆきてきすく、袖解かへてとハ、袖をときかへて男女互に形見としたりしといへり

幸伊勢國時當麻麻呂大夫妻作歌一首

吾背子者何處將行已津物隱之山乎今日歟超良武

わのせこはいづくゆくらんおきつものなばりのやまをけふかこゆらん

此哥巻一にもいでゝ委しく載り

草嬢歌一首　草の下香と落せしハ志のゝハくさのゝけうのあと訓べし

秋田之穂田乃刈婆加香縁相者彼所毛加人之吾乎事將成

あきのたのほだのかりばかかよりあはゞそこもかひとのわをことなさん

穂田ハ刈りごろの田也、刈婆加ハ刈計の畧にて、稲の刈役ふるれることりよ
ちるべし香よりあくしの香ハ変語にて刈役にはまれバ稲みのりて
ちびきよるしあるど男女の念ひ寄へよるなるん、末ハ志ての人より含みさし
バされども人の言さくひさことんといへると為ハいられき巻十秋の田此

吾刈婆可のことなれバ巻十二ニ茅刈婆可尓ゑらしで室ありて刈だるのとハ田を
植るも刈ることあるも一はつ二はつとかずへふるにて男女おもしろくこそはつの
とかで植て刈もするゆゑかよりあひてハ志一はつの中の者ハよそにあひ並びて
初そるあるやうにてつゞけいつはつのぞしハ此の世よといふ人もいへバ一つ田と三つ
ふえけく一はつ二もとの三もつと並べて一もとのより植そめ刈そめて二もとの三
もつと植とりて刈をかるにといつかくてハあるまであつていふよくかなへり、於
吾中人かるべし

鹿ヲ庶ニ誤

志貴皇子御歌一首

大原之此市柴乃何時鹿跡吾念妹爾今夜相有香裳

おほはらのこのいちしばのいつしかとわがおもふいもにこよひあへるかも

大原ハ大和ニて、巻二にも吾をこのさと雪ふりつる大原の古りにしさとハ後
とも大原といひ、いちしばハ櫟柴にて、いつしかといはん序のみ、巻十一道のべの五柴

下のいつはりもとよみたるも同じ

阿倍女郎歌一首

吾背子之。蓋世流衣之。針目不落。入尓家良之。我情副

わがせこがけせるころものはりめおちずいりにけらしもわがこゝろさへ

古事記那賀祁勢流(ナガケセル) 勢ハ勢と々の誤 これもひのもとにふかくけせるハきたるの古言也。蓋ハ

者をとれり。良之の下毛ノ木の字の落たる也。針目落すハ針目もおさむるさへ、

入にけらしハおもひ入をいふ

中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首　続紀和銅四年従五位下とみゆ

獨宿而。絶西紐緒。忌見跡。世武為便不知。哭耳之曽泣

ひとりねてたえにしひもをゆゝしみとせんすべしらにねのみしぞなく

ゆゝしきハいむことゆゝしみとハゆゝしさにといふこと也。巻十二ハあれど妹

しまかれバつらんやと我をかなしむ結る紐の絶しといへるに同じ

阿倍女郎答歌一首

吾以在。三相二搓流。絲用而。附手益物。今曽悔寸

わがもたるみつあひによれるいとをもちてつけてましものいまぞくやしき

孝徳紀三絞之綱ニと出雲風土記三身之綱打挂ニ々、身ハ綾とされみつあひの の誤なり

つなと訓べし。三つ縒によれるをつよく絶がたき糸をいふ。搓ハ廣韻云以手搓系為綫

大納言兼大将軍大伴卿歌一首　安麻呂にて御行てなるべし

神樹尓毛。手者觸云乎。打細丹。人妻跡云者。不觸物可聞

かみきにもてハふるといふをうつたへにひとづまといへバふれぬものかも

うつたへハ本ハ詞うつたへハ堪のこと也ひたすらにといふことにいへり下みう

まさどころわのなのいそれ杉の樹し花の事と字のくさこととも作らう、

宮ちるま神樹かときて訓べし。さうきよてハさてあさものまのひて

此方に叶はずといへり

石川郎女歌一首　即佐保大伴大家也　安麻呂の妻也

春日野之山邊道乎與曽理無通之君我不所見許呂香裳

かすがのゝやまべのみちをよそりなくかよひしきみがみえぬころかも

よそりなくハよるべきところもなきといふ事也巻十四和尓余曽利ハ音の依也

こゝのよそりも同じ心ゆへ佐保大伴の家をさしてかよひし人ハおそれ憚るべき

ところなきこゆれど飛びかりて

大伴女郎歌一首　今城王之母也今城王後賜大原真人氏也　旅人

の妻なり大宰府にて卒し也

雨障常為公者久堅乃昨夜雨尓将懲鴨

あまつゝみつねするきみハひさかたのきのふのあめにこりにけんかも

あまつゝみハ雨を憚りて出ぬをいへりよそのみならずあまつゝみつねするきみハ

あまつゝみしてまちとあれバ雨障とかきてあまつゝみとよめる也　字書ハ

いつもハ公ハ男をさす也

後人追和歌一首　とハ和と同じ心にて本ふりを改む

久堅乃雨毛落糠雨乍見於君副而此日令晩

ひさかたのあめもふらぬかあまつゝみきみにたぐひてこのひくらさん

ふらぬかハふれかしとねがひていへる也あまづゝみハあまづゝみの略

藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌一首　續紀養

老三年七月常陸国守正五位上藤原朝臣宇合管安房上総下総三国とあり同

紀馬養ともありて同人也馬養ハうまかひと訓べければ宇合もうまかひと唱ふべしといふ

宇合を用ゆる八字ノよ保ちし贈太政大臣不比等第三子也とみゆ

庭立麻手刈干布暴東女乎忘賜名

にはにたつあさでかりほしぬのさらすあづまをみなをわすれたまふな

本ハ麻手の畑の麻手小垣内の麻実苅干とあれバこゝも手ハ乎の誤也

麻手小ぶすまとハ手ぶすま也、さて庭に立つハ麻のまくら也、おのれ庭におりたち
て麻を刈その刈れる麻でくゝるを並べて手をとりて寄しのふといひ下し
たり、寄しこせね又、東女ハふすまのことゝいへり

京職大夫藤原大夫賜大伴郎女歌三首　目録に原下麻呂の字有、

こハ続紀養老五年六月従四位上藤原朝臣麻呂為左右京大
夫と見ゆ、略してまへきを卿と書してあるハ其年を略しと通しいへる

嬺嬬等之珠篋有玉櫛乃神家武毛妹爾阿波受有者

をとめらがたまくしげなるたまぐしのかみさびけんもいもにあはずあれバ

神家武古訓めづらしくかんとよめるハよしなし、契沖かみさびけんと訓るに
まされり、神さびハ年へてふるびたるをいふ、櫛の齒づきふりたるといへり、
玉ハほめていふのミ、神さびけんものもいかにの男まつて年へたりしをいひて、
源氏物語の葉上の巻に、さしながら昔を今に伝ふれバむかしのを櫛ぞ神さび

ぬるはいにしへやおもひわかるべきも神ハ借字なれバ心のまゝにかくべしといへり

好渡人者年母有云乎何時間曽毛吾戀爾来

よくわたるひとハとしにもありといふをいつのまにぞもわがこひにける

牽牛の年にひとたびわたるまでまつ人ハありといふを、いつのまにぞもこひにけると
思ひわたるハ逢ずして過す程を経渡るといひて、能渡る人ハ一年も堪
てまつといふを、我ハ逢ずてしばしもたへがたきをいふとなり

蒸被奈胡也我下丹雖臥與妹不宿者肌之寒霜

むしぶすまなごやがしたにふせれどもいもとしねねバはだしさむしも

古事記八千矛神の御歌に、牟斯夫須摩(ジブスマ)なごやがしたにふはやがしたにとあるも
なる衾の和(ナゴ)やかなるをいふ、蒸ハ蒸の誤也、三の句こやせれバと為ハ
よからぬき、こやせハ臥也、二のしハ助辞也、霜ハしもの借字にかりて書る也

大伴郎女和ル歌四首　大伴の下坂上の字を落せる也

爾ハ者ノ誤

狭穂河乃小石践渡夜干玉之黒馬之来夜者年爾母有糠

さほがはのさゞれふみわたりぬばたまのくろまのくるよはとしにもあらぬか

和名抄細石説文云礫 佐ゞ礼以之、ぬばたまの枕詞、あらぬかのかは願ふ詞也

ひとゝせにひとたびなりともかくしてきませと也、黒の字

はこくの言をとれるにて、鳥梅よる梅のたぐひ也、さてぬばたまのは下の夜といふ

へかゝれるにはあらず

千鳥鳴佐保乃河瀬之小浪止時毛無吾戀爾

ちどりなくさほのかはせのさゞれなみやむときもなしわがこふらくは

なみ迄序也、こふらくはこふるを延言、元暦本爾を者に作るによりて改

将来云毛不来時有乎不来云乎将来常者不待不来云物乎

こんといふもこぬときあるをこじといふをこんとはまたじこじといふものを

族ヲ強ニ誤

鳥ハ焉ノ誤

こんといふもこぬことあるを、まして来じといへば来んとはひ

てはまたじといふを、のちにかへりていふ

千鳥鳴佐保乃河門乃瀬乎廣彌打橋渡須奈我来跡念者

ちどりなくさほのかはとのせをひろみうちはしわたすながくとおもへば

打橋は既にいへり、ながくとおもへばは、汝が来と思へば也

右郎女者佐保大納言卿之女也、初嫁一品穂積皇子、被寵無儔、而皇子薨之後時藤原麻呂大夫娉之郎女焉、郎女家於坂上里、仍族氏号曰坂上郎女也 佐保大納言ハ安麻呂卿、郎女ハ家持のをばにて又姑也

又大伴坂上郎女歌一首

佐保河乃涯之官能小歷木莫刈鳥在乍毛張之来者立隱

金

さかづきのつきの志だなみそ。あさつきも。はるしきこゝろぶ。
たちかくるがね

旋頭哥也、つきのこゝろは、きゝ不とりて、古事記哥やまとのこのたゝちふこゝろ
うる伊知能都加佐（イチノツカサ）とてまく、歴木ハくぬぎ也、小きを業に刈て焼けバのく
ちりし、鳥ハ雪の浜、年中でとしやとしとのむべき多し、あさつきハ立
ちそて也、張ハ借字にて春也、しハ助辞、またたち立隠まして見遊んと
りつて、がねハ既にいへり

天皇賜海上（ウナカミノ）女王御歌一首　倭紀養老七年正月従四位下とし御、

天皇ハ聖武天皇也、御の下製字を落せるを

赤駒之越馬柵乃緘結師妹情者疑毛奈思

あかごまのこゆるうませの志めゆひしいもがこゝろはうたがひもなし

馬柵をうませと訓たれど宜もうし、巻十や宇麻勢胡之（ウマセゴシ）とあり、巻十二柵

柵越尓とありしうませごしと訓べければ、こゝもうませとよむべし、せハせきなる
べしといへるぞよき

右今案此歌擬古之作也但以往當便賜斯歌歟

源道別云、擬ハ疑の誤、往ハ時の誤にて、且當時よろしの轉倒しるるなるべし、さらで
疑古之作也、但以當時便宜とよろしなるべし、巻十八以古人之跡代今日之意ま
た巻十五當所誦詠古歌なといへる類とてつかへ此段によるべし、契沖ハ文選擬古
詩のゝをとりてくはしくあげつらへれど、よくもかなはずこそきこえたれ、あまさる例
なければとるべくもあらず

海上（ウナカミ）女王奉和歌一首　志貴（え）皇子之女也

梓弓爪引夜音之遠音爾毛君之御幸乎聞之好毛

あづさゆみつまびくよとのとほとにもきみがみゆきをきかくしよしも

幸ハ車の字の誤なるべし、みことゝ訓べし、車ハ借字にて御言なり、

随身が夜の陣に候を名のりていふ、よるのことにハ二つありける説
のなを君きこえてきねいふさ、よそなりけるものの名に言をときけるに
よろしきなり

大伴宿奈麻呂宿禰歌二首　佐保大納言第三之子也
続紀養老三年備後守正五位下管安藝周防二国とあるも此国にての女
を通せし時の歌にの

打日指宮爾行兒乎真悲見留者苦聴去者為便無
うちひさすみやにゆくこをまかなしみとむればくるしやればすべなし
打日さすハ枕詞。まかなしミハ集中かなしきならなどいへるにひとしく
きこゆることハほむる詞。去をゆるしていやるなればやるとして聴去とかけり。

難波方塩干之名凝飽左右二人之見兒乎吾四乏毛
なにはがたしほひのなごりあくまでにひとのみるこをわれしともしも

なごりハ塩波のさまきのこりてのこれるをいふ、くのあるさまによる
ことき妹とを君ハいへるなりとなしとぞ、書ハ七なごのはれぬけのなごり
をきもいその浦にて乱てあしんともよめり

安貴王謌一首并短歌
遠嬬。此間不在者。玉桙之。道乎多遠見。思空。
とほづまのここにあらねばたまぼこのみちをたどほみおもふそら
安莫國。嘆虚。不安物乎。水空徃。雲爾毛
やすからなくになげくそらやすからぬものをみそらゆくくもにも
欲成。高飛。鳥爾毛欲成。明日去而。於妹言問。為吾
がもたかくとぶとりにもがもあすゆきていもにことどひわがために
妹毛事無為妹。吾毛　事無久。今裳見如。副而毛欲得
いもことなくいもがためにわれもこともなくいまもみしごとたぐひてもがも

遠づまとハ左注にいへる八上采女之八上ハ因幡の郡名にて其の
郡の采女をめしのぼせ給へるを、本つ国へ退られたると思ひめるや、
たまかぎるのたハ發語、思ひそら敷くもとはいへるハ宿りの事也あか
むなしくて、さまよひけるハ前に聞ゆる集中にも多し。又信信の事也
ころもなきとふる日ド、云云とはまくも安らかならずとねがひて云
事なくの下五字一句落たるべし。此比時節も集中に多くあればかくも
よみなかく有しの、上へもてゆきて見ば宜しかるべし時見しめくならし
いまさらといへり、さて妹毛事事無云云一の事ハ衍字なれば除
たゞひとゞがゆハそひ居をまかんといふなし

反歌

敷細乃手枕不纒間置而年曾經来不相念者

しきたへのたまくらまかずへだておきてとしぞへにけるあはなくおもへバ

しきたへの枕詞相の下日の字落たるか、わくらばと訓べからずともいふなり。念ハ念の字誤字なるべし宜もハ
いそれき、されど結句補穏やかならずそしくハ念の字誤字なるべし
いふ可考べし

右安貴王娶因幡八上采女係念極甚愛情尤盛於時勅断不敬之罪退却本郷焉于是王意悼怛聊作此歌也

門部王戀歌一首

飫宇能海之塩干乃潟之片念爾思哉将去道之永手呼

おうのうみのしほひのかたのかたもひにおもひやゆかんみちのながてを

和名抄出雲国意宇郡あるハその海なるべし、本ハ片思とはゞん序之、
永手のてハ長道ひそ、やがて道之これハ往来を編く及出雲の任に
下向る時、道すがら又ハおもひ出てよみて贈れるなるべし

右門部王任出雲守時娶部内娘子也未有幾時既絶往

来累月之後更起愛心仍作此歌贈致娘子

高田女王贈今城王歌六首　考ハの傍ニ高安之女也とあり

事清甚毛莫言一日太爾君伊之哭者痛寸取物

ことゞよくいともなくいひそひとひだにきみいしなくはいたききずかも

末の君伊の伊ハ下へ付る助辞にして、哭ハ借字、無の意にて君なくは

いたかるべきれど一ツに辞なきし挨拶なるべし

他辞乎繁言痛不相有寸心在如莫思吾背

ひとごとをしげみこちたみあはざりきこゝろあるごとなおもひわがせ

あはしのびあたりやうまねかつるなれば、光七人云をさとさちらち

こみよあるがおもしらぬ人のみることわを裁ことを

吾背子師遂常云者人事者繁有登毛出而相麻志呼

わがせこしとげむといはゞひとごとはしげくありともいでゝあはましを

墓ヲ基ニ誤

しハ助辞にしてうせこゝにはあらねば略れるなるべし。しかの伊ハ悪くなりたるなり

吾背子爾復者不相香常思墓今朝別之為便無有都流

わがせこにまたはあはじかとおもへばかけさのわかれのすべなかりつる

みあふことハあらざらんとおもひしなるべし、墓ハ基字を誤れるなるべし

てあるゝ云々

現世爾波人事繁来生爾毛将相吾背子今不有十方

このよにはひとごとしげしこむよにもあはむわがせこいまならずとも

常不止通之君我使不来今者不相跡絶多比奴良思

つねやまずかよひしきみがつかひこずいまはあはじとたゆたひぬらし

たえまなくかよひしきみが使さへまねばいよいよいはんとす

ひさしむなしんといふ

神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時為贈従駕人所誂

娘子笠朝臣金村作歌一首并短歌　後紀十年辛卯紀伊へ

幸のをりのうた

天皇之．行幸乃随意．物部乃．八十伴雄与．出去之．
すめろぎの、いでましのまにまに、ものゝふの、やそとものをと、いでゆきし
愛夫者．天翔哉．軽路従．玉田次．畝火乎
うつくしづまは、あまとぶや、かるのみちより、たまだすき、うねびを
見管．麻裳吉．木道爾入立．真土山．越良武公者．黄
みつゝ、あさもよし、きぢにいりたち、まつちやま、こゆらんきみは、もみぢ
葉乃散飛見乍．親．吾者不念．草枕．客
ばのちりとぶみつゝ、しくしくもわれはおもはず、くさまくら、たび
乎便宜常思乍．公将有跡．安蘇蘇二破．且者雖知．
をよろしとおもひつゝ、きみはあらんと、あそゝには、かつはしれども、

之加須我仁．黙然得不在者．吾背子之．往乃万万将追跡者．
しかすがに、もだもえあらねば、わがせこが、ゆきのまにまに、おはんとは、
千遍雖念．手弱女．吾身之有者．道守之．将問答
ちたびおもへど、たをやめの、わがみにしあれば、みちもりの、とはんこたへ
乎．言将遣．為便乎不知跡．立而爪衝
を、いひやらん、すべをしらにと、たちてつまづく

八十伴の男と大みともの人々、天飛やハ枕詞、軽の路ハ第一に既出、ここにいふ、
軽の市よりこくのさきけば、むぶさき畝火の山に向ふるの事もゆるべし、この
言ハ妹が将ふいひのけより、我れが軽とうねびハをしとみゆ、まつち
山ハ大和と紀伊の堺にて、来ておもしよしきと紀伊までのまつち山とよめり、
とりまつちの時と云なるべし、あると訳して思ひやりして、幸をかご
とふ別て旅路をよろしきものとおもひつく、あそゝハ浅く、うすくの

人の國こしきこといへども、よしといふこの、末のこゝろハさまたげに同じ、かくいひてん
あらねども、此語文にならひあらじおもひいふに増しくいでたてあられねバ
之、第くハ言をかり用ひ、道を略して關守とあり、同じからん、又ぐと共にいはく
しハせんうへを志らぎしてといへる之

反歌

後居而戀乍不有者木國乃妹背乃山爾有益物乎
おくれゐてこひつゝあらずバきのくにのいもせのやまにあらましものを
こゝろ、あらんよりハ、妹せの山のごとくあらバかく別るゝことハなかるべしと也

吾背子之跡履求追去者木乃關守伊將留鴨
わがせこがあとふみもとめおひゆかバきのせきもりい、とゞめてんかも
木の関守伊ハ伊と上の句に見るべし、これハ志斐伊ハまをせ、又家にある妹伊などいふの伊に同じく、下へ付ける助語也

二年乙丑春三月幸三香原離宮之時得娘子作歌一首
并短歌　笠朝臣金村
聖武天皇二年五月壬申朔乙亥甕原離宮へ幸あるし、みかの原ハ山城国相楽郡也、笠朝臣金村の五字時の字の下にあるべし、さて旅の途にて遠くりし娘子ハ紀路の遊女ならん

三香之原客之屋取爾珠桙乃道能去相爾天雲之
みかのはらたびのやどりにたまぼこのみちのゆきあひにあまぐもの
外耳見管言將問緣乃無者情耳咽乍有爾
よそのみ見つゝことゝはむよしのなけれバこゝろのみむせつゝあるに
天地神祇辭因而敷細乃衣手易而自妻跡
あめつちのかみことよせてしきたへのころもでかへておのづまと
憑有今夜秋夜之百夜乃長有與宿鴨
たのめるこよひあきのよのもゝよのながさありこせぬかも

たびのやどりハ幸の時従駕の人の仮菴をいふ。道の行あひハ離宮へ行
路にて行合しをいふ。おもてハよそにてふといへる料に、よそのみ見てハ
よそのみといふを思ふ。こゝによせてハ宜もなき事依と同じ意にて訓
のよせ給ひてとこそいへり。志さへのハ枕詞、衣よくてハ神さびるて
といふ物にして、自妻おのづまと訓べし。半千に於能豆麻乎ひとのさとにおき
とおけハ、わか衣のもすそハ君が衣のかくといふを思ひ、與ハ乞の誤、おりこ
せぬるもハあれうしと録ずる歌之

反歌

天雲之外従見吾妹兒爾心毛身副縁西鬼尾

あまぐものよそにみしよりわぎもこにこゝろもみさへよりにしものを

んさんまさんでいそんがあし、そのいふ鬼の字をものとよむハ史記齊
悼恵王世家に舎人恠之以為物而伺之 索隠曰姚氏云物恠物 又和名抄鬼 安之岐毛

乃なぞあそ

今夜之早開者為便乎無三秋百夜乎願鶴鴨

このよらのはやくあけぬればすべをなみあきのもゝよをねがひつるかも

五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任餞于筑前國蘆
城驛家歌三首 續紀和銅四年四月丙午朔壬午授正六位下石川朝臣
足人従五位下とみえ、こゝにあそんとあり

天地之神毛助與草枕羈行君之至家左右

あめつちのかみもたすけよくさまくらたびゆくきみがいへにいたるまで

大船之念憑師君之去者吾者将戀名直相左右二

おほぶねのおもひたのみしきみがいなばあれハこひんなたゞにあふまでに

大ぶねのハ枕詞、こひんなのなハ、てといひおさふる詞

山跡道之島乃浦廻爾縁浪間無牟吾戀巻者

やまとぢの志まもみらんわまよるなみのあひだもなからんかごこひまくハ
大和へ上る度なれバこのくいふまく、島のうらハ筑前志摩郡志摩にあれ
バぞこの浦をといふなるべし、こひまくそハこひんハ也
右三首作者未詳
大伴宿禰三依歌一首　續紀天平宝字三年五月甲戌朔壬午從
五位下大伴宿祢御依為仁部少輔とみゆ
吾君者。和氣乎波死常念可毛相夜不相夜二走良武
わがきみハわけをばしねとおもへかもあふよあはぬよふたゆきぬらむ
君ハ女をさして、和氣ハ自称詞にし翁ハいひれき、宝もちもとめて人の名又姓のうバ
ねなどまわけともいへるもあり、集中にいへるわけハ異にして一種之、
集中のわけハ人を賤しめて此称へ此おもし君ハ汝ハわねとおもふまやといふことなく、
こま汝ハ即よみ人の我るれど、おもふこの君の方よりいひ付るなま汝といふことよ

すなる之此歌をいふへき和氣をと（六和と知る注）ほめんとてわしやでといふるハ太と同じ、
もハ戯奴がふるあやめてもまれまの作るなと、是ハりとあるも汝が為へに渡る
ことハさきつらいあの作るんや（六吾と君と注）和氣とへ来るよとい汝へ、さて此ハの更
なる二そハ紀女郎がぬ我を腑する歌なれバ、賤しめて汝といふべくもあらぬ
を、志のいへるハたゞふれ之、かよ戯奴よなしといふれるゆゑと戯ハせることのく、
戯よ奴のやうしいやしめていへることえ、わおもしへ云するよ、君をわけハ思ふことに、
是ハうけといふハ我をといへるなれども、紀女郎が戯にふるめかれてわざとかおもて
とわけと鵠めていへるを受て、そわけとのるまよ我をていひきこえ彼方（アナタ）の君の
それの頭を受て、こちらよりいふすじの此歌もらかんといへり、わけを
自称としてハ此之え、あれハ太の説よよるべし、二ゆくのゆくハ古事記の
葦原中国悉闇因此而常夜往（トコヨユク）とあるゆくまく吋刻の経行すへ、是丸とこ
しへよ夜みゆけやるといひて、夜とみるも経行え、此日もうつせみの世やも二行

痛ハ病ノ誤

ともハ世やハニつひ經行べしそのふゆきあらんハ逕者とおハぬ者と經行と
いふ逕ハ誤字なるべしと宣長いへり、もしくハ走ハ去の誤ならんか、云のるろ
おのへうもハおもんばかりのこゝろ

丹生女王贈太宰師大伴卿歌二首　續紀天平勝宝二年七月
從四位上丹生女王授正四位上とみゆ

天雲乃遠隔乃極遠鶏跡裳情志行者戀流物可聞
あまぐものそきへのきはみとほけどもこゝろしゆけばこふるものかも
そきへハ祝詞退立極（ソキタツキハミ）、年中山のそきけのそきゝきりて均しき言ハ極の
まてとらふ、とほけどもハ遠けれども

古人乃令食有吉備能酒痛者為便無貫簀賜牟
いにしへのひとのをさせるきびのさけやめばすべなしぬきすたばらん
古の人とハ別帥てもとなし、とらせるハ令飲なり、飲ますをそとそとふり、

縣ヲ頴ニ誤

須よいへるハ齊明紀の字よ、かゝるいろえきうなしきこしやうし鳩野、きびの
酒ハ吉備の国より出せる酒なるべし、或説ニ吉国の陶淵明が傳にうるしの秫
うつ作れる酒といふなりとぞいへども国なくさるさきこゝろざし、貫
簀ハ主殿式三年一請貫簀一枚とあるにてもて簀をおもくたちひのよつよ
うみうハ水のちらぬ用なるにて擁あるとぞ、うハ酒は破病、嘔吐（タグリ）ある料よ
せんとりふえけふ字ハ卅てのからうを女ましへ酒を勝られさるま思ふ読よある
ふし破らく病めハもとべくるまじまめきしてをしてまいしんとも之、痛え唐なる病まて

太宰師大伴卿贈大貳丹比（タヂヒノ）縣守（アガタモリ）卿遷任民部卿歌一首
續紀和銅三年三月癸卯從五位下多治比真人縣守為宮内卿一と旅
まし入あ

為君釀之待酒安野爾獨哉將飲友無二思手
きみがためかみしまちざけやすののにひとりやのまんともなしにして

崇神紀ハおほみわの介〓之〓〓とよミて酒とつくるとかむとよミ、巻十
六ニ、味酒を水ニ醸ミ吾待しといひ、古事記ニ其御祖息長帯日賣命醸二待酒一以
獻ヨシテ、ちゞへ人を待ニ対せ又ニ醸すると待酒といへり、やすの野ハ筑前夜
須郡之、神功紀元年層増岐野ニ到まして熊鷲を取ころまして我心安
しとのたまひしより其處を安といふとそ、是がる醸くとる程飲むを
きれバ猶やのミんとし

賀茂女王贈大伴宿禰三依歌一首　元故左大臣長屋王之女也、

巻八注ニ長屋王之女母曰阿倍朝臣也とあり

筑紫船未毛不来者豫荒振公乎見之悲左

つくしふねいまだもこねばあらかじめあらぶるきみをみるがかなしさ

これハこれからふねのいまだ来ずして別れをおしむべきに、まだきよりうとうとしく荒備ちる
そこよあるやくおもふるハ疎くなるをなげくなるべし

土師宿禰水通従筑紫上京海路作歌二首　伝わかれず

大船乎榜乃進尓磐尓觸覆者覆妹尓因而者

おほぶねをこぎのすゝみにいはにふれかへらばかへれいもによりてば

まさみといふもまさみといふと同じ、ふりかへらばかへれ、わがその妹ニあはんとそ
いそぐ心をいへり、てばハてしばし

千磐破神之社尓我掛師幣者将賜妹尓不相國

ちはやぶるかみのやしろにわがかけしぬさはたばらんいもにあはなくに

上の歌と合せ見るに海路の恐れおそやうなるをして身を祈るなるを
よみたるなるべし、ただしんハ幣をさして祈れといふ

太宰大監大伴宿禰百代戀歌四首

事毛無生来之物乎老奈美尓如此戀于毛吾者遇流香聞

こともなくいきこしものをおいなみにかゝるこひにもわれハあへるかも

おいなみハ年次の次に同じく、やうやく老行と云、空老云、生ハ在の謂也といへり、
古訓もあまたしとあれバ、字の儘に何事にてもよまるべし
をといひつゞき、又生来をらバあれこし訓くハよろしからんといふべ
されど、そハよのつねの次の郎女の身にかゝるよしといひしかバ此時郎女
た字まもよみつけて、百代の孫ことなるべし、志かれバ此次の郎女の名ハ
あくしく云のなりん

孤悲死牟後者何為牟生日之為社妹乎欲見為禮

こひしなんのちハなにせんいけるひのためこそいもをみまくほりすれ

元暦本後を時とせり

不念乎思常云者大野有三笠杜之神思知三

おもはぬをおもふといはゞおほぬなるみかさのもりのかみしらさむ

和名抄筑前大野郡に、神功紀熊鷲を撃んとしたまふて、御

笠風に随ふ家を御笠といひし由訓ものしハ脱簡、巻十二おもも
ぬをおもふといへども依りそのまつれ神ぞしるらむ

無暇人之眉根乎徒令掻乍不相妹可聞

いとまなくひとのまゆねをいたづらにかゝしめつゝもあはぬいもかも

人に恋しるれバ眉のかゆきといへること集中に多し、巻十二にいのきて
ていそき眉根を掻よかしそてもあはぬ人かも

大伴坂上郎女歌二首

黒髪二白髪交至耆如是有戀庭未相爾

くろかみにしろかみまじりおゆるまでかゝるこひにはいまだあはずに

郎女いまだ老たる程にハあらじを、百代の身にこもる戀をかく白髪交
などよまるもの、次の歌にもよむ事に逢しにハあらじで、巻十七なる
ゆきの之路髪麻泥尓とあれバしらのみと訓ハよろし

山菅乃實不成事乎吾爾所依言禮師君者與孰可宿良牟

やますげのみならぬことをわれによせいはれしきみはたれとかぬらん

山菅ハ和名抄麦門冬夜麻須介　さてこの葉中麦の子ならぬよ

實ならでハ只言をいはん為のみにて、ならぬといふ詞までハかゝらず、所

依ハよせてよむべし、君ハたれとかぬるらんと言、君ハ人をいひ、君ハ誰ハ

誰とか寝らんとなり

賀茂女王歌一首

大伴乃見津跡者不云赤根指照有月夜爾直相在登聞

おほとものみつとはいはじあかねさしてれるつくよにたゞにあへりとも

おほとものハ枕詞さて、みつとハ難波の御津なるをかけていひ訓あまりて、

えつきいはずといひなしたる、赤ねさし枕詞

太宰大監大伴宿禰百代等贈驛使歌二首

丞ヲ丞ニ誤
看元省ニ作

草枕羈行君乎愛見副而曾来四鹿乃濱邊乎

くさまくらたびゆくきみをうるはしみたぐひてぞこししかのはまべを

しかの濱ハ筑前也、たぐひてこしハ遠く送り来れるといふ

右一首大監大伴宿禰百代

周防在磐國山乎将超日者手向好為與荒其道

すはうなるいはくにやまをこえんひはたむけよくせよあらきそのみち

和名抄周防玖珂郡石国

右一首少典山口忌寸若麻呂

以前天平二年庚午夏六月帥大伴卿忽生瘡脚疾苦枕席因此馳驛上奏望請庶弟稲公姪胡麻呂欲語遺言者勅右兵庫助大伴宿禰稲公治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人給驛發遣令看卿病而逕數旬幸得平復于時稲公

療ハ愈ノ誤カ

等以レ病既療發レ府上レ京於レ是大監大伴宿祢百代少典山
口忌寸若麻呂及卿男家持等相送驛使共到夷守(ヒナモリ)驛家
聊飲悲別乃作此歌

太宰帥大伴卿被レ任大納言臨レ入レ京之時府官人等餞卿
筑前國蘆城驛家歌四首　天平二年十月大納言に任らる

三埼廻之荒磯爾縁五百重浪立毛居毛我念流吉美
みさきまのあらいそによするいほへなみたちてもゐてもわがおもへるきみ
こゝさき廻はさきめぐりをいふ、和名抄汀水際平砂也和名三左木、廻(ワ)ハ浦廻磯廻の
ゐのごとし、上ハ立てゐてもといはん序のミ

右一首筑前掾門部連石足(イソタリ)

辛人之衣染云紫之情爾染而所念鴨
からひとのころもそむとふむらさきのこゝろにしみておもほゆるかも
本ハ心に染といはん序のミ、辛ハ借字にて韓也、又ハ辛ハ淋の誤なるべく
よき人の意也、辛ハ宰ハ字万二字あるといへり

山跡邊君之立日乃近付者野立鹿毛動而曽鳴
やまとへきみがたつひのちかづけばぬにたつしかもとよみてぞなく
大和の方へ之、麻呂たちかへるを知りて鹿もとよみ鳴くといへる、本近の下付の
字を脱せるを、元暦本によりて補へり

右二首大典麻田(アサダ)連陽春　此名やうしゆんとよまん、続紀神亀元年五
月辛未正八位上答本陽春賜麻田連姓とあり

率ハ樂ノ誤

月夜吉河音清之率此間行毛不去毛遊而将帰
つくよよしかはおときよしいざこゝにゆくもゆかぬもあそびてゆかれ
行ハ帥をさして、不去ハ府の友人をいへり、ゆかんとするをゆかれといふハ
例也

右一首防人佑大伴四綱(ヨツナ)　佑とハ大佑少佑とて侍れど

太宰帥大伴卿上京之後沙彌滿誓賜卿歌二首　賜ハ贈る

ハ贈るとて

真十鏡見不飽君爾所贈哉旦夕爾左備乍将居

まそかゞみ見あかぬきみにおくれてやあしたゆふべにさびつゝをらん

旅の字ハ借りて後まで又傍例のごとく従ふるまゝにとるべし左備

ことハさびしくをらんとなり

野干玉之黒髪變白髪手裳痛戀庭相時有来

ぬばたまのくろかみしろくかはりてもいたきこひにはあふときありけり

おほ大伴坂上郎女が黒髪も白髪まじりてあるなりとハ恋侍でし

男女の恋ハ年月をへだて相見ることの絶がたき故いたき痛くせがるをいふ

大納言大伴卿和(ヌ)歌二首

此間在而筑紫也何處白雲乃棚引山之方西有良思

こゝにありてつくしやいづくしらくものたなびくやまのかたにしあるらし

京に帰りて後思ひやらるゝ事ハ筑紫ハ何処を不知といふ心ハ能で

草香江之入江二求食蘆鶴乃痛多豆多頭思友無二指天

くさかえのいりえにあさるあしたづのあなたづたづしともなしにして

草香江ハ河内也なにはつくしといへん所なるべし鶴の妻を求さびしげなるこ

るさまにまよふをふまへ又かなしくしハへかはりてかなしき事ハ彼の旅信ふるまひを

多くなどしくなりて同じ此十五にあづ例あべきとして見らるるあ

なたづくし精さぬれバ

太宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井連大成悲歎作歌

一首　續紀神龜五年五月正六位上葛井連大成授外從五位下ことみ

まそみ由

従今者城山道者不樂牟吾将通常念之物乎

いまよりハきのやまみちハさびしからんわがかよハんとおもひしものを

是ハ大伴坂上郎女、今もかも大城の山といふ、是五百代の句、この城の山よ
そぶらあり太宰府より筑後へ越る道のある也とぞ、みな人きくんといふハ、
帥の卿へ思ひをよせしとぞ

大納言大伴卿新袍贈攝津大夫高安王歌一首　贈の字

一本卿の下ニ、此時衣服の製改せるなり、又ハ新しく作るといふ其の

吾衣人莫著曽網引為難波壮士乃手爾者雖觸

わがころもひとにきせそあびきするなにはをとこのてにはふるとも

きんぞせるなれバゆかりの人ならでハきせそめそといふ意なり
さてハこの新キの袍をまとひて、それがよろしからんとおもひて、
あみかけ往返するを見給ひて、是ハれども紀なからんとて、宮をさ
しのくハ餘のものをよしとてハ、それがえ□ろまうけんからハさて
あら、よしなきことおもへれども、はとしみゝ□のの名ハ
ちゞ□ハ錦の下不の字落たる也、さらバ又ハよれるとも訓べし、三四の句ハ言

安王とゝはれていふなどといへり猶考べし

大伴宿禰三依悲別歌一首

天地與共久住波年等念而有師家之庭羽裳

あめつちとゝもにひさしくすまはんとおもひてありしいへのにはゝも

太宰の任中の居の庭をよむなるべし、はしハ古今集にれぐさの
宮のやまもあれどもそのなげのまのはかなさもものにしかず
又よめるを敷く詞也、是二を仰せたまへらんと思ひて住へまつりし
ひとびとなりけるなり

金明軍與大伴宿禰家持歌二首　元明軍者大納言卿之資人也

奉見而未時太爾不更者如年月所念君

みまつりていまだときだにかはらねばとしつきのごとおもほゆるきく

かくるねぞハ俗のかくらぬといふへん

足引乃山爾生有菅根乃懃見巻欲君可聞

あしびきのやまにおひたるすがのねのねもころみまくほしききみかも

ねもころハねんごろといふ詞のこと

大伴坂上家之大娘報贈大伴宿禰家持歌四首

生而有者見巻毛不知何如毛将死與妹常夢所見鶴

いきてあらばみまくもしらずなにしかもしなんよいもとゆめにみえつる

契沖云こゝろハいきてあらバまたもあふべきを、なにしかもしなんよいもとゆめにみえつらん、又あふことのなからんとおもふにしもあらねど、しなんとて

ねをおほくの［illegible］人までかくおもひしよしハこひしなんとえ

えつらんとよめり

丈夫毛如此戀家流乎幼婦之戀情爾比有目八方

ますらをもかくこひけるをたをやめのこふるこゝろにくらべめやも

万解四上　三十四

従ヲ今徒ニ誤

女の一つ［illegible］

［illegible］

ぞくるしき

月草之徒安久念可毋我念人之事毛告不来

つきくさのうつろひやすくおもへかもわがおもふひとのことゝもつげこぬ

つきくさハ集中鴨頭草とも書く。濃縹色の［illegible］つきくさ［illegible］

うつりやすくおもへかも、［illegible］

なれバ人の心の［illegible］

［illegible］事ハ借ていふ、言之

春日山朝立雲之不居日無見巻之欲寸君毛有鴨

かすがのやまあさたつくものゐぬひなくみまくのほしききみにもあるかも

［illegible］

大伴坂上郎女歌一首

出而将去時之波将有乎故妻念為乍立而可去哉

いでゝいなんときしハあらんをことさらにつまおもひつゝたちていぬべしや

指ざる時よりあるべきや、出て行ことハあらんに、ことさらにつまをおもひつゝ

たちとゞまりいぬべきにあらずとおもふこゝろ之

大伴宿禰稲公(イナギミ)贈田村大嬢歌一首 元大伴宿奈麻呂卿之女也、

続紀天平十三年十二月従五位下大伴宿祢稲君為因幡守となる、

上巻帥大伴卿病時驛使に賜ふ庶弟稲公とあるも

不相見者不戀有益乎妹乎見而本名如此耳戀者奈何将為

あひみずハこひざらましをいもをみてもとなかくのみこひバいかにせん

まへにかへハなかりてよし、恋ぞハ恋来ることくハとりまし

右一首姉坂上郎女作 首ハ云の誤なるべし

笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首

吾形見見管之努波世荒珠年之緒長吾毛将思

わがかたみみつゝしのばせあらたまのとしのをながくわれもおもはむ

かたみをみつゝしのびたまへ、年の緒ハ玉の緒の縁の緒にてひさしく、年をながく

緒くくものなかきをいふべく緒のことゝ加へるなるらん

白鳥能飛羽山松之待乍曽吾戀度此月比乎

しらとりのとばやままつのまちつゝぞわがこひわたるこのつきごろを

白とりの枕詞、とば山大和の内なるべし、山しろの名所ならず、なほハ待ち

つゝといはん序のみ

衣手乎打廻乃里爾有吾乎不知曽人者待跡不来家留

ころもでをうちみのさとにあるわれをしらにぞひとはまてどきずける

ゑぐしと枕詞にうちの里ハ巻十一まきびの中廻前のいそぶちにもよるべく
也バ大和の竹ぶひの事ともいはれき、宮ちかき中巴里の中ハ折の
誤なるべし、むかしむさしと訓べし、とうとむとハ遠を訓まれハむる里まてにと
遠きよしと乃の字ハ訓を誤て侍よりつけるが本文になれるなるらん、十一の
巻の中巴前も同じく中ハ折の誤なるに、をちこちむくまちるべし、此ちるよハ訓
らじといつて、折るべし

荒玉年之經去者今師波登勤與吾背子吾名告為莫
あらたまのとしのへゆけバいましはとゆめよわがせこわがなのらすな
今ハとおもひハ助辞のこ、お訓ミし事久しきよし也るみえ、わが名をと人に
告らしすなれとし

吾念乎人爾令知哉玉匣開阿氣津跡夢西所見
わがおもひをひとにしらせやたまくしげひらきあけつといめにしみえつ

鶴ヲ今鴨ニ誤

しらせやハしらせばやに、下ニ細刀なとの略そへてあまらん一細のごの
ずといたるにあらん為らずよみおき、昔のいひならはしなるべし

闇夜爾鳴奈流鶴之外耳聞尓可將有相跡羽奈之爾
くらきよになくなるたづのよそのみにきゝつゝかあらんあふとはなしに
あふのみがたくおもひぬるよしなり

君爾戀痛毛為便無見楢山之小松下爾立嘆鶴
きみにこひいたくもすべなくならやまのこまつがもとにたちなげきつる
鶴をとこ、本に鴨に作る一本に依て改、なんべきハせんすべなくなげき

吾屋戸之暮陰草乃白露之消蟹本名所念鴨
わがやどのゆふかげくさのしらつゆのけぬがにもとなおもほゆるかも
夕陰草ハ草の名にはあらず、水陰草山陰草といへるに同じく、庭の草花の
草に、なにはさしいわん庭のこ、はぬるにハ清しあるほどふといふ言之

幸ハ牟ノ誤

吾命之将全幸限忘目八弥日異者念益十方

わがいのちのまつたからむかぎりわすれめやいやひにけにはおもひますとも

将全幸ハまさけんとよみて、まさきくあらんのことく、まさくれと元

唐本幸を牟に作るによりてまさむらんとよまんハ誤れり

八百日往濱之沙毛吾恋二豈不益歟奥島守

やほかゆくはまのまさごもわがこひにあにまさらじかおきつしまもり

八百日ゆくハおほくの日数をあゆみゆくといふ事にて、かぎりなく遠き浜といふ

云々。島もりハ島守る山守るなどいへる類也。一首の意のさまハよく聞えて須よ

後世の学問と没まさ

宇都蟬之人目乎繁見石走間近君爾恋度可聞

うつせみのひとめをしげみいしばしのまぢかききみにこひわたるかも

うつせみのいそぎしのハ枕詞

恋爾毛曽人者死為水瀬河下従吾痩月日異

こひにもぞひとはしにするみなせがはしたゆわれやせつきにひにけに

恋にもぞ人ハ死するかのおそれあるをいへる也。下ゆハ底よりと同じく人しれず

ものおもひに痩るをいへり。水無瀬川ハ巻十一水無瀬川又水無瀬川ともよみて水の下

無の字落たるにや。是ハ砂のみありて川の水の下をくゞりてながるゝ

小水の瀬川といふ心。されバ下従といはん序とせり

朝霧之欝相見之人故爾命可死恋渡鴨

あさぎりのおほにあひみしひとゆゑにいのちしぬべくこひわたるかも

朝霧ハおほにといはん料のミ。おほよハ人なるふとなるに之

伊勢海之礒毛動爾因流浪恐人爾恋渡鴨

いせのうみのいそもとゞろによするなみかしこきひとにこひわたるかも

本ハかしこきといはん序也。恐き人とハ身分の又ハおそれおほき人をいふべし

従情毛吾者不念寸山河毛隔莫國如是意常羽
こゝろゆもあハおもはざりきやまかはもへだゝらなくにかくこひむとは
今よりハ家ハおもはざりけりと云之あなたもさりさていひて皮まやしきや
ようをこえてなれバ次まんゆてあハおもはざりきとまゝてよろこびてまゝんと
とりつと今をみるべし、へだゝらなくにハへだゝらぬまゝにかはのかハはなく
よふべし山と河と二つといへり
暮去者物念益見之人乃言問為形面景為而
ゆふされバものおもひまさるみしひとのこととふすがたおもかげにして
こゝろまハものいひし室ちハことゞふすがたとよまんといへり
念西死為物爾有麻世波千遍曽吾者死變益
おもひにしにするものにあらませバちたびぞわれハしにかへらまし
志ちまんべく死の事とおもふすなれ過去を勿めるなり

剱太刀身爾取副常夢見津何如之怪曽毛君爾相為
つるぎたちみにとりそふとゆめにみつなにのさがぞもきみにあはむため
剱らにハ桃弧ま非やきの八祥の字けさ見ハ何のさがぞと思ひて段て
さりんとてなしんと自ら思ゑ、刀ハ男の具なれバそれと身まそふ
るハ男まさるしさとしるべし
天地之神理無者社吾念君爾不相死為目
あめつちのかみもことわりなくばこそわがおもふきみにあはずしにせめ
舒明紀天神地祇共證之とある證とをことわりとよみて、
なくことハ祈きるしなくしいふべし
吾毛念人毛莫忘多奈和丹浦吹風之止時無有
われもおもふひともなわすれおほなわにうらふくかぜのやむときなかれ
おほなわとの詞ゆのとて、巻十一あつさことふくいふ詞とり見え、くさし

まてとうくふ誤写なるべし、宮もハ且尓祁丹の誤にて、おきまけよる
らんのといへり、猶考べし

皆人乎宿与殿金者打礼杼君乎之念者寐不勝鴨

みなひとをねよとのかねはうつなれどきみをしおもへばいねがてぬかも

ねよとの鐘ハ亥の時也、天武紀人定（ヰノトキ）と見ゆ、亥の時に人ハいねてしづまれバ
しかいへり、いねがてぬハ、いねかぬるにて、集中いねがてといひ、いねがてぬ
といへる、皆いねかてにといふ一つ言なるを、ぬハ添る詞にて、打の下太子の字
落しなるべし、全ハ借字也

不相念人乎思者大寺之餓鬼之後尓額衝如

あひおもはぬひとをおもふはおほでらのがきのしりへにぬかづくがごとし

佛にむかひてぬかつくさへあるを、餓鬼のしりへにぬかづくハ益
なきこと、思ハぬ人を思ふ事の、此寺々の女（メ）がきさまをさくらく

といふなく、かハ慳貪の悪報を受、さんがうにハ餓鬼と作
てあらるなるべしと契沖いへり

従情毛我者不念寸又更吾故郷尓将還来者

こころゆもあはおもはざりきまたさらにわがふるさとにかへりこむとは

契沖云、さきの宮ふなりし山のこと故、かへりよろしくもまへのまゝ
こふ事も死むとして、古き里の家にてまづ帰りこんとハ思ハざりしを
いまなるべしといへり、されども其は此歌の家ハ、たまたま別後更来ることあれば、をと
女のよみ侍るに、又家とほく隔りて後よみてたてまつるなるべし

近有者雖不見在乎弥遠君之伊座者有不勝自

ちかくあればみねどもあるをいやとほくきみがいまさばありかてましも

みねどもあるとハ、見ずしてもあるなどす、ありかてましも、ましもハ在かねんと云、
もハ助辞、自ハ目の誤也

者ハ煮ノ誤 等ハ尓ノ誤

右二首相別後更来贈

大伴宿禰家持和歌二首

今更妹爾将相八跡念可聞幾許吾胸鬱悒将有

いまさらに いもにあはめやと おもへかも こゝたわがむね おぼゝしからむ

あはめやハあはんやハあらじといふ意也。おもへかもハおもへばかも也。妹のことハ

とこそよおもへざりてなきざらんと思へバ、そこばくわがむねのおぼつかなかるらんと云

なるべし。意ハおのれを始めて二そのこゝろへし

中中者黙毛有益呼何為跡香相見始兼不遂等

なかなかに もだもあらましを なにすとか あひみそめけん とげざらなくに

者一本煮ニ作ル。等一本爾ニ作ル。かれハ誤なり。かゝるおもひのなくてとげざらんにハ

同じくはおもんあと、何しにおもひそめけんとも、とげざらんにハとげざる

ふこと、それはなにとなのこゝろへし

山口女王贈大伴宿禰家持歌五首

物念跡人爾不見常奈麻強常念弊利在曽金津流

ものおもふと ひとにみえじと なまじひに つねにおもへり ありぞかねつる

なまじひハ強而也。おもへどしのびかねてありとしもおもへる也

不相念人乎也本名白細之袖漬左右二哭耳四泣裳

あひおもはぬ ひとをやもとな しろたへの そでひづまでに ねのみしなかも

なかもハなかんといふに同じ。上の人をやのやの詞を結べり

吾背子者不相念跡裳敷細乃君之枕者夢爾見乞

わがせこは あひおもはずとも しきたへの きみがまくらは いめにみえこそ

せめて枕なりとも夢に見えよと願ふ也。見えこそハ見えよと所ニ云

劒太刀名惜雲吾者無君爾不相而年之經去禮者

つるぎたち なのをしけくも われはなし きみにあはずて としのへぬれば

つるぎたち枕詞、此十二ヶ八日よりて末此の下の五の二句きゝやすく成

従蘆邊滿来塩乃彌益荷念歟君之忘金鶴

あしべよりみちくるしほのいやましにおもへかきみがわすれかねつる

なかばのやまとふといへん序のみ、此まへよりうたへるのみ、こゝをさとられかぬるとは

と君がのこゝいとけふ八條也

大神（オホミワノ）女郎贈大伴宿禰家持歌一首

狹夜中爾友喚千鳥物念跡和備居時二鳴乍本名

さよなかにともよぶちどりものもふとわびをるときになきつゝもとな

大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌　此郎女後は大伴宿奈

麻呂の妻となりて二女を生て寡となりぬ、此三祭神等などをよめるは、

此寡居の時麻呂よりつけたるをうらみてのわかれなく、是をうらみよめるなる

なるべし

押照難波乃菅之根毛許呂爾君之聞四乎年深長

おしてるなにはのすげのねもころにきみがきこしてとしふかくながく

四云者真十鏡磨師情乎縦手師其日之極浪之共

しいへばまそかゞみとぎしこゝろをゆるしてしそのひのきはみなみのむた

靡珠藻乃　云云　意者不持　大船乃　憑有時丹

なびくたまものかにかくにこゝろはもたずおほぶねのたのめるときに

千磐破神哉将離　空蟬乃人歟禁良武　通為　君毛

ちはやぶるかみやさけけんうつせみのひとかさふらんかよはせしきみも

不来座　玉梓之　使母不所見成奴禮婆痛毛為便無三

きまさずたまづさのつかひもみえずなりぬればいたもすべなく

夜干玉乃夜者須我良爾赤羅引日母至闇　雖嘆

ぬばたまのよるはすがらにあからひくひもくるゝまでなげけども

徘徊ヲ今徘徊ニ誤

知師乎無三、雖念、田付乎白二、幼婦常、言雲知久、
志るしをなみ、おもへども、たづきをしらに、たをやめと、いはくもしるく
手小童之、哭耳泣管、徘徊、君之使乎、待八兼手六
たわらはの、ねのみなきつゝ、たもとほり、きみがつかひを、まちやかねてん

おもてる枕詞、昔ハ根しりとも云ふ料のし、四の下乎ハ手の誤と宣長いへりき
してハのくまひてん、年深くハ光三芳哉みるき堤ハ年深みともいひて、
残るをいふてハ来しせし絶じといへども、ときはをゆるしてハ此下を
同語也し、もしよのかるへをもしとゆるべく人またびきしといふ、
集中掃ち引てゆるさるでわちまぜバかゝる意にハあそぎしましと云也、
その日の猶ほハ年月よりしてこのうきといふがめし、むさハ昔よのた詞ま
よまむ、かゝるくふみかすでにハ、涙のまよまかなくてへなびく漾
のやくふハおもで、一をぢふ思ひよのむといふて、我やさけんハ秘事と

我の名けをせしこやといふて、歎の字ハえなりて言ふく支ア、人ハかゝるみてんハ人の
きへつゝんやと、あくりし挽詞、ゝるやめハ弱女ならく、女の手力もなくと云どハ
なよゝといふ、いをなくまゝくハいたんも忠すしゝ、ゝるゝハ掌よのまゝ此の事し
と云ふ如と云を画り、ゝみれさハ始ねさころにいはきこのせし地也、一もちずに思ひまだて
まうしと、男も思ひますで、彼もみえぞ来れハ、せんもなべなくてしよさひる
思ひ歎けじしもかひもなくして、ぶだ主かくほやもく彼のまゝとのこや
待かねてんと也

反歌

従元、長謂管、不念恃者、如是念二、相益物歟
はじめより、ながくいひつゝ、たのめずハ、かゝるおもひに、あはましものを
不の下の念ハ今の誤なるべしと契沖いへり、このあぞもハこのよしめでくハえなか
先のちまにも深くもくしいへハまも絶とぶしんをゆるしてしといふて

あつやまくかじゐよりしもくくいひくくるのまもむまそといふ

西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈夫君歌一首

續紀天平四年八月丁酉ニ授外從五位下とみゆ

無間戀爾可有牟草枕客有公之夢爾之所見

あひだなくこふれにかあらむくさまくらたびなるきみがいめにしみゆる

夫のこひつれバ其のおもひ妾がゆめにみゆるといふ也

佐伯宿禰東人和歌一首

草枕客爾久成宿者汝乎社念莫戀吾妹

くさまくらたびにひさしくなりぬればなをこそおもへなこひそわぎも

なをこそハ妾をさしていふ、おもふこひおもふ也むつまじきなり之

池邊王宴誦歌一首　續紀神亀四年正月無位池邊王授從五位下、

大友皇子之孫葛野王之子淡海真人三船之父也とみゆ

松之葉爾月者由移去黄葉乃過哉君之不相夜多焉

まつのはにつきはゆつりぬもみぢばのすぎぬやきみがあはぬよおほみ

くつるとゆつるともにうつる也、すぎぬやのやハ君があはぬ夜おほみといふを

ねがひのあまりいふなり、上ハ松を待にいひかけてさて月のうつるを

きくといへり、烏とあるハ焉を誤れる也、古本によりて改つ

天皇思酒人女王御製歌一首　女皇者穗積皇子之孫女也

聖武天皇の皇女、光仁天皇の皇女、續紀寶亀元年十一月乙未朔甲子授

從四位下酒人内親王三品とみゆ

道相而咲之柄爾零雪乃消者消香二戀云吾妹

みちにあひてゑまししからにふるゆきのけなばけぬがにこふといふわぎも

ゑましハ咲也、けなばけぬがにハ消ぬべく也、こふハ念の誤まれる也、こひ

おもひてきこえたる也、さてこひといひて女王のこひをまつもとしていふことにこと

かけてしのはん

高安王褁鮒贈娘子歌一首 元高安王者後賜姓大原真人氏

續紀天平十一年四月甲子従四位上高安王らに賜大原真人之姓とあり

奥幣往邊去伊麻夜為妹吾漁有藻臥束鮒

おきへゆきへにゆきいまやいもがためわがすなどれるもふしつかふな

今やハいまよ也藻ふしつか鮒ハ藻に臥る一つかの鮒といふなるへし漁ハ

拙按に石師といふ歌に、なハ妹がためとし漁せるといふつゞきといふのに定む

ハ伊麻夜といふやと訓て勤の功をせらしと解すべし

八代女王獻天皇歌一首 續紀天平宝字二年十二月丙午毀

従四位下矢代女王位記以被幸先帝而改志とあるも

君爾因言之繁孚古郷之明日香乃河爾潔身為爾去

きみによりことのしげきをふるさとのあすかのかはにみそぎしにゆく

一尾云龍田超三津之濱邊爾潔身四二由久

一におのなみにハたつたこえみつのはまべにみそぎしにゆく又ハ改也

娘子報贈佐伯宿禰赤麻呂歌一首 娘子詳ならず報ハ

衍字か又ハ贈答の歌が落たるにや

吾手本将巻跡念牟大夫者戀水定白髪生二有

わがたもとまかんとおもはんますらをハおちみづもとめしらがおひにたり

ますらをハ枕をせんよのつま定ものいへるハ之一二四条を句とつゞけて又さらに

さらに句の外へ歌としいふことをほのかにいひてありなしとはつかの

ばきこゝろむで、変水ハ旧都とかて字、定ハ志てあるを以て借るる

佐伯宿禰赤麻呂和謌一首

白髪生流事者不念戀水者鹿煮藻闕二毛求而将行

しらがおふることハおもはずをちみづハかにもかくにももとめてゆかむ

ものあはせてよめる也、好子がよしもつらのおもむきはいさゝかなるのくみにも酒
をもてなしめぐりてあるへきなりとぞ

大伴四綱宴席歌一首

奈何鹿、使之来流、君乎社、左右裳、待難為禮

なにしかもつかひのきつるきみをこそかにもかくにもまちがてにすれ

此宴あまりおもしろきに人々はかへらるゝよしにてまあるよしの使をはやくのせん、
まちをこゝろてよめてとぞ

佐伯宿禰赤麻呂歌一首

初花之、可散物乎、人事乃、繁尓因而、止息比者鴨

はつはなのちるべきものをひとごとのしげきによりてよどむころかも

此女の家に夜のまにかよひてもおしらゝはおもらんとおもへど人め揮るくとぞおもれ
るのまるハ思ふ女をおもひくるう

湯原王贈娘子歌二首 志貴皇子之子也

宇波弊無、物可聞人者、然許、遠家路乎、令還念者

うはへなきものかもひとはしかばかりとほきいへぢをかへさくおもへば

此下ニ得羽重無妹ともまたあるにはいつれが心あるへきなきともかきたれば
るはまたよしあしともいひ、或説にハ素道之源氏物語などにたゞうるへきの情なき
みそかしあはれをよするのいろへこゝろえくかたし、又うるへのなさ
けハおのづからそなへてつけつべきわざとやおもふよし同じくおもきなれど
つれなくこゝろにてハ深きかんじもなし、えもしあるとうはべのなさけあらはし
うはへといへり、宝ちさ此詞ハ俗字おもきるときゝつまて中まるの物語
なぐさむにへなきといひるらハ此うハへなきの猶まるうらく同じきをなほゆこい
へり、詠まる一の上重もしかなるハ深まる何ら一ん指語まらうるへといへるも
此よろしかるへしい人ハ此所うるへ計の物をもえつれとい教えし

目二破見而手二破不所取月内之楓如妹乎奈何責

めにはみてとられぬつきのうちのかつらのごときいもをいかにせん

和名抄ニ兼名苑月中有河、河上有桂、高五百丈とあるを[illegible]

いへるとしみゆ、和名抄 楓 乎加豆良 桂 女加豆良 と[illegible]用ひ[illegible]

娘子報贈歌二首

幾許思異目鴨敷細之枕片去夢所見来之

いくばくもおもひけめかもしきたへのまくらかたさるいめにみえこし

巻五[illegible]伊加波加利（イカバカリ）[illegible]

[illegible]

巻五 麻久良佐良受提（マクラサラズテ）[illegible]

[illegible]巻十八 夜床加多古里（ヨトコカタコリ）

[illegible]床を避（サリ）て[illegible]湯

率ヲ今䢧ニ誤

原王[illegible]

[illegible]

家二四手雖見不飽乎草枕客毛妻與有之乏左

いへにしてみれどあかぬをくさまくらたびにもつまのあるがともしさ

[illegible]率[illegible]

[illegible]

[illegible]

湯原王亦贈歌二首

草枕客者嬬者雖率有匣内之珠社所念

くさまくらたびにはつまはゐたれどもくしげのうちのたまこそおもほゆ

[illegible]匣中の[illegible]或人云[illegible]

[illegible]匣の中の[illegible]妻[illegible]

まうさじといはでつくしと宣ものいへり

余衣形見爾奉布細之枕不離巻而左宿座

わがころもかたみにまつるしきたへのまくらかはさでまきてさねませ

まつるハ遣の事とよめるも、かくさはさでハ離さずく、又枕とさゝでくもむ

ぞし、まきてハ纏ふく、さハ発語、君も旅紹ながら隔てぬる事ありなくかく

ハよこのつまこの又或人の紀の云くなかしバ娘子ハ君なるぞまかりて、これと離るんな

やりしとも登し

娘子復報贈歌一首

吾背子之形見之衣嬬問爾余身者不離事不問友

わがせこがかたみのころもつまどひにわがみハさけじことはとはずとも

嬬どよはるとつまどひとよみてハ離えのこれハ物いはずとも...げなせ

とふむひとくあ...しといふ

湯原王亦贈歌一首

直一夜隔之可良爾荒玉乃月歟経去跡心遣

たゞひとよへだてしからにあらたまのつきかへぬるとおもほゆるかも

巻十二うつせみの世のことぶとおもへども懐てきけバ心遮焉これをとこゝろ

ハなぎさと訓り、遣ハ遮節のことにてまくおもひをもしるべし、さてこゝハ

もとめらへなれバ遮の字の上不のつまあへし心ハなぐさめてともんの要

如いへり、吾のれどもなぐさめとりつ何なし、古点のごとくおもひゆるうもと旨

べき事也、遊別云所思義なきまゝしが、かくん遮二字を誤るならんといへり

娘子復報贈歌一首

吾背子我如是戀禮許曾夜干玉能夢所見管寐不所宿家禮

わがせこがかくこふれこそぬばたまのいめにみえつゝいねらえずけれ

こふれバこそのバと思ふ人つねならぬ事をとりて知し

湯原王亦贈歌一首

波之家也思不遠里乎雲居爾也戀管将居月毛不經國

はしけやしまぢかきさとをくもゐにやこひつゝをらむつきもへなくに

そこのさとハ近きところ、月ハ經ねど、くもゐの如遠く隔りてと

ちりてるとく之

娘子復報贈和歌一首　目録ニ和の字なし

絶常云者和備染責跡焼太刀乃隔付經事者幸也吾君

たゆといはゞわびしみせんとやきたちのへつかふことハよろしくやわぎみ

焼太刀の枕詞、身につくるハ刀ハ鞘と隔てまたそへるなり

奈何好去哉吾妹（イカニヨケクヤワギモ）

と訓べし、ハつきハ後に也

湯原王歌一首

吾妹兒爾戀而亂在久流部寸二懸而縁與余戀始

わぎもこにこひてみだれバくるべきにかけてよせんとわがこひそめし

在ハ者の注ちるべし、和名抄云辨色立成反轉 文流 閉抲、漢語鈔説同、繰車

唐韻云繰 訓久流 絡糸取也

紀女郎怨恨歌三首 元 鹿人大夫之女名曰小鹿安貴王之妻也

世間之女爾思有者吾渡痛背乃河乎渡金目八

よのなかのをみなにしあらバわがわたるあなせのかはをわたりかねめや

左ハ久ノ誤

又ハ廣背のほとりへひろせの、廣瀬川ハ手七はよめり、宮もハ吾ハ君の隠る
てきみぞのかゝるなるべしといへり、打ちべし、次の二そうと合せるべきなり
詠るしるまくよめるなるへし

今者吾羽和備曾四二結類氣乃緒爾念師君乎縱左思者

いまはあはわびぞしにけるいきのをにおもひしきみをゆるさくおもへば

いきのをハ命をいふ ゆるさくハゆるすを延いひてゆくべきなつかしくせつなく
いせ物語にたとへこのうる月ひこうたるを外てたゝとかくてといへばさんへ
とゝもゆるして共へハ詞べきれど一本たと久ゝ作れゝバたハ誤まて一本よろ
しく なれば

泣ヲ流ニ誤

白妙乃袖可別日乎近見心爾咽飲哭耳四所泣

しろたへのそでわかるべきひをちかみこころにむせびねのみしなかゆ

泣と流と云一本によりて改つ 飲を歌に作るハ のるむねよむせびてとも

わらんこて宝思をいつも

国立公文書館
National Archives of Japan